



○令和元年度の終わりに思うこと

～「何でもない日々、当たり前の日々が、どれほどありがたい（有り難い）ものか。」～

新型コロナウイルスの感染拡大予防対策として3月3日（火）からスタートした町内小中学校の臨時休業。当初は、このまま来年度の4月7日（火）の始業式まで、「全校登校なし」に推移するのかと危惧していました。この間、学校としては家庭訪問、児童の受け入れなどを行い、子供たちの生活・学習支援を可能な範囲で行ってきました。広い校舎に・校庭に・体育館に、全校児童の声が響かない日が、まだ続くのかと寂しい日々を過ごしていました。しかし、18日（水）から町内一斉に臨時休業中の出校日として学校が再開し、朝から子供たちの声が響く八東小学校に戻りました。うれしい限りです。

18日の朝、久しぶりに登校する子供たちの笑顔が印象的でした。子供たちは、教室や廊下で久しぶりに会う友達と元気なあいさつを交わしていました。久しぶりに、八東小学校の「つながる子」の輪ができました。

そして、快晴の日・3月19日（木）の令和元年度の第3回卒業証書授与式は、式の一部を変更しましたが、在校生も参加しての卒業式を無事に実施できました。卒業生の笑顔も溢れました。思えば、3月2日、急遽、最後の3月全校集会で歌った歌、「旅立ちの日」・「さようなら」を、19日に再びみんなで歌うことができたことは、何よりもうれしいことでした。卒業生の中学校の制服姿もあって、2日の時とはすっかり雰囲気も変わり、卒業生に在校生にも、きっと心にくる卒業式になったと思います。歌声もすばしかったです。全校みんなで卒業式ができたことが、何よりも「有り難いこと」でした。式辞では、卒業生にはいつも繰り返し言い続けた「一日一日を大切に」を話しました。卒業生のこれから歩む時代、今まで以上のスピードで社会が変化します。そんな時代に生きる卒業生に、「一日一日を大切に、一生懸命歩んでほしい」そんな思いを伝えました。

それは、在校生に対しても同じです。小学校・中学校の義務教育9年間。同じ場で学び、同じ場で遊び、同じ場で共に生活します。しかし、「15の春」には、別々の道へと進みます。だからこそ、日々の学校生活の一日一日を大切に歩んでほしい。そんな思いがあります。今回の臨時休業でも分かったように、「何でもないような一日、当たり前のような一日、いつもと同じように訪れる一日」が、どれほど貴重なものか。どれほど大切なものか。どれほど有り難いものか、そのことをもう一度、考えてほしいです。

今日、令和元年度の修了式を無事に終わりました。最後になって予想だにしない年度末となりましたが、全校児童141名が、令和元年度の卒業証書授与式・修了式を無事に終えることができました。保護者の皆様には、この間、学校の状況を御理解いただき、本当にありがとうございました。

さて、「令和」の元号の発表の際に個人的に切に願ったことは、「令和」の時代が、平和であること、穏やかな日々であることを願いました。そして、2020年の東京オリンピック・パラリンピックが無事に開催できることも願いました。しかし、現状は、新型コロナウイルス感染拡大により、まだまだ、不安要素が山積し、先の見えない状況でゴールが見えません。しかし、日本の力・世界の力を結集して、この難局を克服していきましょう。それができると確信しています。今こそ、「日本の底力」を世界に見せましょう。

そして、何よりも八東小学校141名全校児童がみんな元気で、それぞれ進級し・進学し、4月7日（火）の令和2年度の第1学期始業式、8日（水）の令和2年度の小中の入学式を、いつもと同じように迎えることができることを願います。平穩無事に、令和2年度が始まることを、切に切に願います。



【25名の卒業生（ピアノ藤原愛さん）と在校生も全員参加して、第3回卒業証書授与式ができました。】

○これからの子供たちに伝えたいこと。 今こそ、「レジリエンス」が大切です。 ～ 校長からの最後のメッセージ ～

昨年度4月八東小学校に着任し、慌ただしく過ぎる日々の中で、校長としてシンプルに子供たちの目指す姿を示したいと考え、「めざす児童像」として、「つながる子」「うみだす子」「やりぬく子」、そして本年度は「かかわる子」を加えて、子供たちに伝え続けてきました。そして、子供たちもこの「めざす児童像」に向けて全校が取り組んでくれました。その様子は、これまで様々な場面でお伝えしてきたとおりです。

さて、こうした児童像についてこの2年間子供たちに伝えてきました。しかし、今しみじみ思うことは、更にこれから先を考えた時、子供たちに必要な心とは、必要な力とは、「生き抜く力」です。時代が著しく変化し、社会がグローバル化する中で、日本という国が諸外国から様々な影響を受ける時代になっています。今回の「コロナウイルス感染症」でも、そのことを痛切に思います。変動する時代です。そんな激動・変動が予想される時代を生きる子供たちに必要な力とは、その根幹は、「生き抜く力」です。それを支える力として、①「学び続け、考え続ける力」 ②「協働する力」 ③「ねばり強く、やりぬく力」だと思います。そして、最近、頓に思う力に④「レジリエンス＝おれない心・めげない心・へこたれない心」があります。2月の参観日でもお伝えした力です。この力の存在が、全ての根底にあるように思います。

先日、3月11日（水）、9年前に東日本大震災の発生した朝、テレビを見ていた時、昨年から高校野球で話題となっていた岩手県陸前高田市出身で、地元・大船渡高校を卒業し今年から千葉ロッテマリーンズに入団した佐々木朗希選手についての報道を目にしました。

実は、彼は9年前の東日本大震災の津波によって、父（功太さん）と祖父母を亡くしました。男兄弟3人（朗希さんは2番目）と父母、祖父母の7人家族の幸せな日々が、あの津波によって奪われたのです。彼が高田小学校3年生・9歳の時です。そうした試練に遭いながらも彼は野球を続けます。もちろん決して順風満帆ではありませんでした。中学時代は怪我をした時期もあります。それを乗り越え、高校入学時には、県外の野球の有名校からの誘いもありましたが、彼はそれらを全て断り、中学時代の仲間と野球をすることを決め、地元の大船渡高校に入学します。そこには、「地元の人々を励ます、地元の人々の力になる」そんな思いもあったようです。地域の人々に勇気を与える進路を、彼は選択したわけです。溢れるばかりの「郷土愛」を感じます。

津波で父や祖父母を亡くしたことについて、彼はこんな風に答えています。
「悲しいことではあったんですけど、すごく、今に生きているなど、当たり前が当たり前じゃないとか、今あるものが、いつまでもあるわけじゃないとか、そういうのを思い知らされました。」

彼のこうした発言や、3月11日の日の報道を聞きながら、彼の心にしっかりと育っている「レジリエンス＝おれない心・めげない心・へこたれない心の存在」を強く感じました。試練に出会い、苦難に向き合った時、どう自分の一歩を踏み出すのか。前向きに歩む力を育てるには、優しさでなく、やはり、厳しさが大切だと思います。実は、佐々木朗希選手の兄・琉希さんが、父・功太さん亡き後、父親代わりとなり、朗希選手に「マナーや礼儀、上下関係の大切さ、まわりの人への感謝など、日々の生活の中で、人としてあるべき姿や生き方を厳しく教えていた。」という母親の話がありました。「レジリエンスを育てるには、誉めるのではな、しっかりと厳しく教えていく。時には、叱る。」こうしたことが大切だと、最近思います。

愛情を持って、叱ることは大切です。そのことが、やがては、子供の「レジリエンス＝おれない心・めげない心・へこたれない心」を育てることになります。今思えば、我が家も厳しい父母でした。二人兄弟の兄も、私に厳しかったです。でもそれが、今の私をつくっていると思います。今は亡き3人に感謝です。

これからの時代、大切なのは、「折れない・めげない・へこたれない心＝レジリエンス」です。それが、「生き抜く力」になります。

○八東小学校のこの2年間に感謝します。

最後になりましたが、この2年間ありがとうございました。すばらしい八東の子供たちに、学校の取組を理解し応援して下さった保護者・地域の皆様に、心から感謝します。八東小学校で教員生活の最後を勤めることができたことは幸せでした。

この2年間、去年は月毎に、今年は毎号、校長の「独り言」を読んでいただきありがとうございました。今年は号を重ねる毎に、次第に字が小さくなり、大変申し訳なく思っていました。つつい思いが溢れ、次第に紙面が足りなくなり、結局、字を小さくせざるを得ませんでした。読みづらかったことと思います。お詫びします。

毎号、「柏葉の杜」には、学校での日常を紹介しながら、今後の教育の動向や日々の思いを書き記してきました。独りよがりなこともたくさん書き記していたことと思います。しかし、いつも書きながら思うことは、今回もまた、こうして「学校便り・柏葉の杜」が発行できた。そして、次は何を書こうとあれこれ思い悩みながらも、次号を発行できた。その繰り返しができていることに、感謝の気持ちでした。

「日常」とは書きますが、「常なる日」はないのかもしれませんが、「一日一日は、奇跡の連続」です。先日、3月11日、東日本大震災の起きた9年目の朝、テレビを見ながらそんなことを思いました。振り返ればいろいろあった2年間でしたが、37年間の教職生活の最後を締めくくるにふさわしい充実した2年間になりました。子供たち・保護者のみなさん・地域のみなさん・そして、すばらしい先生方に、感謝です。

ありがとうございました。御世話になりました。

